心理学と目的論

Psychology and Teleology

教育心理学教室　田　丸　敏　高

Toshitaka Tamaru* : Psychology and teleology. (Journal of the Facultyof Education, Tottori University, 〈Education Science〉, 1988, 30-1)

はじめに

心理学は，心理的活動の法則を明らかにする科学であるが，そのことによって，人間の諸行動を因果論的に説明しようとする。では，そのときの原因とはいったい何だろうか。自然科学で使われているような言葉の意味において，そのときの原因を理解してもよいのだろうか。この問題は，行動の説明の段階以前において，人間の諸行動をどのような言葉で記述するかという段階から，心理学という科学にとって本質的な問題を提起している。

話をわかりやすくするために，１つの例を取り上げてみよう。ある男が，目の前のテーブルの上にあるグラスに手を延ばし，ワインを飲もうとする場面を思い浮かべて欲しい。この場面をどのような言葉で記述することが適切なのだろうか。

A；有機体O（ある男）が，刺激S（ワイン）に対して接近反応R（飲む）をした。

これは，従来心理学で用いられてきた「刺激―反応（S―R）」図式による記述の仕方である。刺激と反応の結合の反復によって有機体の行動を説明するものである。刺激と反応との間に有機体の嗜好性を入れて，「S―O―R」図式によって説明しても，要は変わらない。行動の原因は，現前している刺激とされる。

しかし，人間の行動は，このような単純な記述によって理解されうるのだろうか。

B；その男は，グラスを左手で取り上げた。どこかにまだ，不自然さが残っている。しかし，もう来てしまった。窓越しに灰色の日本海をながめながら，男は，昨日までの人生に別れの乾杯をした。

小説や文学は，人間の行動を緻密に描写する。架空の出来事であっても，読者は，リアリティを感じる。登場人物や場面に対して，何らかの感情が引き起こされる。小説や文学は，心理学などより人間や人生について何倍も多くのことを語り，また教えてくれる。

しかし，建築における芸術性と科学性とが異なるように，人間行動の記述においても文学的芸術

* Department of Psychology, Faculty of Education, Tottori University.

性と心理学的科学性とは異なる。芸術が，事態を形象化するとしたら，科学は，事態を抽象化し単純化する。どのように美しいものがどのように美しい動きをしていようとも，物理学は，それを物体の運動として，重さや距離，時間の関数として記述するだろう。これと同様に，心理学も抽象化や単純化を行うし，また，行わなくてはならない。人間も１つの自然であり，その心理も自然史の発展の中で生まれてきたものである以上，心理的活動は自然の法則にしたがって営まれていると考えざるを得ない。その法則を捉えるためには，抽象化や単純化は避けられない。問題は，それがどのような抽象化であり，単純化であるかという点にある。芸術的リアリティと科学的真理性とは異なる。

問題はもとに戻った。人間の行動の記述に際して，抽象化や単純化は避けられないにしても，その本質的特徴を失わないためにはどうしたらよいのだろうか。人間の本質については，哲学の世界において，様々な議論が続けられてきた。その１つとして，人間の行動の目的的性格をあげるものがある。たしかに，目的を持って行動するということは，人間が社会的であることや言語を持っていることと並んで，人間を人間として際だたせている重要な特徴である。人間の行動は，刺激に対する受動的なものとしてではなく，能動的，意識的，目的的に行われる。しかし，それを心理学が，科学としてどう取り扱うかという問題は，実は非常に厄介な問題なのである。本稿の課題は，人間の行動の目的性をどのように理解し，科学的研究としてどのように取り扱うべきかを巡って行われた論争を検討しながら，人間の行動にふさわしい記述の方法と説明の方式について考察することである。

１．行動の原因論

心理学は，種々の行動の事実を問題にし，その原理や原因を求めてきた。そして，近代科学としての自立を求めて，現在いくつかの行動の説明様式を持つに至っている。こうした心理学の原因論を広い意味での原因論の中に位置づけてみよう。アリストテレスは，物事の原因について次のように述べている。

――なお，アイティオン［原因］というのも，このアルケーと同じだけ多くの意味に用いられる。というのはアイティオンはすべてアルケー［原理］だからである。――さて，これらでみると，これらすべての意味でのアルケーに共通しているのは，それらがいずれも当の事物の「第１のそれから」であること，すなわちその事物の存在または生成または認識が「それから始まる第１のそれ」であることである。しかし，これらのうち，その或るものはその当の事物に内在しており，他の或るものはそれの外にある。さて，それゆえに，事物のフィシス［自然］も原理（アルケー）であり，ストイケイオン［元素，構成要素］もそうであり，また，それのためにであるそれ［目的（トフー・ヘネカ）］も同様である，というのは，善や美は多くの物事の認識や運動の始まり（アルケー）だからである。[1]

こうして，アリストテレスは，物事の原因を大きく４つに分類する。[2]

①事物がそれから生成し且つその生成した事物に内在しているところのそれ［すなわちその事物の内在的構成要素］
②事物の形相（エイドス）または原型（パラデイグマ），その事物のなにであるか（トテイエーンエイナイ）［本質］を言い表す説明方式ならびにこれを

包摂する類概念およびこの説明方式に含まれる部分［種差］

③物事の転化または静止の第1の始まり（アルケー）がそれからであるところのそれ［始動因，出発点］

④物事の終わり（テロス），すなわち物事がそれのためにであるそれ［目的］

これらは，①質料因②形相因③始動因④目的因と呼ばれ，アリストテレスの哲学のなかでは，それぞれ重要な意義を持っている。しかし，近代科学のなかでは，これらがすべて同等な意義を持ったわけではない。近代科学は，アリストテレスの言う始動因を主たる科学的な原因とした。そして，とりわけ，目的因に対しては，非科学的なものということで敵対的な態度をとった。心理学においても同様な傾向がみられる。

では，心理学において行動の原因はどのように説明されるのであろうか。

A．刺激（stimulus）

行動の原因を刺激に求めるのは，最も一般的な説明方式である。ある行動が生じたのは，これこれの刺激に因っているとされる。その際，行動は反応と呼ばれる。その典型が，行動主義の心理学の立場である。S－Rというのがその図式である。この図式は，現在行動主義以外の心理学においてもよく用いられている。とりわけ，学習心理学では，中心的な説明方式であり，刺激の種類と提示順序をコントロールすることによって学習を成立させようとする。行動の原因が刺激に求められる以上，行動の記述においては対応する刺激の記述を欠かすことはできない。

B．能力（competence）

同じ刺激を与えても，赤ん坊と成人とでは反応が異なる。人間は，年齢とともに成長するからである。このとき用いられるのが，能力による説明方式である。すなわち，行動はある発達的能力の発現として説明される。その際，行動はパフォーマンスと呼ばれる。発達心理学において，優勢な説明方式である。したがって，子供の行動の記述においては，対応する能力が仮定されながら記述されることになる。なお，能力は，人間の様々な行動領域（運動，適応，言語，社会性など）に応じて，あるいは，心理機能（感覚，知覚，思考，感情，人格など）に応じて，記述される。

C．人格（personality）

人間の場合，同じ刺激場面におかれても，人によって示される行動が大きく異なることがある。人間は個性的存在だからである。このとき用いられるのが，人格ないし性格による説明方式である。すなわち，行動の違いは，人格や性格の違いがもたらしたものとされる。その際，行動は特性として呼ばれることが多い。人格心理学や性格心理学において，よくみられる説明方式である。したがって，行動の記述においては，一人ひとりの特性の違いが念頭におかれることになる。

以上，心理学の主だった，行動の説明と記述の様式をあげてみたが，これをアリストテレスの原因論に対応させてみよう。刺激は，近代科学同様の始動因に当たるものであろう。ここでは，行動は物理現象のように取り扱われる。能力はどうだろうか。大脳の働きを前提として考えれば，これは質料因と言えるだろう。発達は，行動の潜在的な可能性として想定できる。人格は，その人間の本来の姿，すなわち本質に関連している。これは，行動の形相因と言ってもよかろう。図1は，こうした関係を全体として図式化して示したものである。

刺激→反応	；行動心理学
能力→パフォーマンス	；発達心理学
人格→特性	；人格心理学

図1　心理学における説明方式

このように，心理学は，他の近代科学に比べてまだ多様な原因論を持っていると思われる。それは，人間の科学の未熟さだけではなく，人間の行動の複雑さにも起因しているのではないか。そして，さらに考えなければいけない問題として，目的因の問題を付け加えることにする。

2．目的論論争

一般に目的因は，科学的説明においては排除されてきた。心理学に隣接している科学である生物学の歴史においても，目的因を排除することが科学としての発展の条件でもあった。しかし，心理学の対象である人間は，明らかに目的を持って意識的に行動している。この問題をどう解決したらよいだろうか。1940年代に，この問題を巡って，すでに重要な論争がなされている。これは，後にサイバネティクスの発展をもたらすものであったが，心理学のなかでは，あまり注目されていない。そこで，本稿ではこの論争を振り返りながら，心理学において目的因をどの様に位置づけるべきなのかについて検討してみたい。

ウィーナーらは，目的（purpose）や目的因（teleology）といった概念が行動研究にとって必要であり，有効であることを強力に主張した。[3] 彼らは，行動主義的方法が専らインプットとアウトプットとの関係だけを問題にしているのに対して，「研究対象の特有の構造（structure）や本来の体制（organization）[4] に接近することが必要であるとして，選択的機能的方法を提起した。これによれば，行動体の現在の状態と最終の状態との関係から，行動をいくつかの種類に分類することができる。例えば，行動体Aと目標物Gがあるとする。そのとき，

(1)　Aは自ら動いているかどうか
(2)　AはGに到達するという最終の状態に向かっているかどうか
(3)　AはGが動いた場合自ら軌道修正してGに到達するかどうか
(4)　AはGの動きを推定し先廻りした行動をとるかどうか

等が，行動を分類しその法則性を考えるうえでの基準になるのである。図2は，ウィーナーらの行動分類の仕方をしめしたものである。

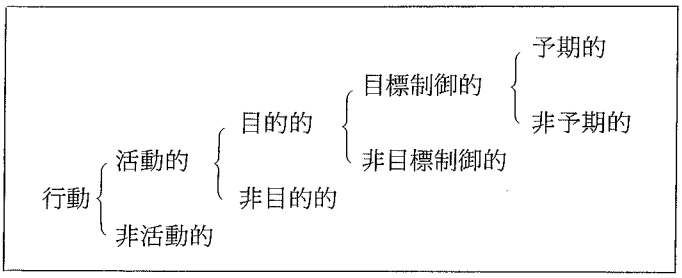

図2　行動の分類

(1)　活動的（active）；行動体が，ある特定の反応に含まれているアウトプットエネルギーの源である行動
(2)　目的的（purposeful）；行動体が，他の物体や事象と時間的あるいは空間的に一定の相関に到達するという最終の状態へ向かっていると解釈された行動
(3)　目標制御的（teleological）；ネガティヴフィードバック（行動の過程で物体の活動を修正する，目標からの信号）によって制御された行動
(4)　予期的（predictive）；目標の動きを推定して行う行動。この行動は，推定する動きの数によりさらに分類される。

こうしてウィーナーらは，動物も人間も機械も同一の原理で説明できるとした。つまり，目的的概念の導入により，ある完全行動系列の研究と理解を前進させたことになる。[5]

たしかに，インプットとアウトプットとだけによって行動を説明するより，目標との関係から行動体内部の心理的諸機能を追究した点，ウィーナーらの考え方の重要な意義が認められる。ところが，こうした考え方は，かなり機械論的な傾向にあることにも気づくであろう。すなわち，人間のモデルを取り入れることによって，機械の人間化には大いに役立つかもしれないが，人間の特有性の理解にとっては，不満足な点も目につきやすい。テイラーは，ウィーナーらに対し，目的的な概念（purposeやteleology）の無効性を示しながら反論した。[6][7]

テイラーの批判の要点は，次の通りである。

(1) ウィーナーらの基準では，行動を分類しえない。たとえば，ウィーナーらは，ある行動が目的的であるかどうかを最終状態へ向かっているかどうかによって判断しようとしているが，どんなものでもなんらかの最終状態に達するのであるから，それは判断基準にはなり得ない。
(2) ウィーナーらは，観察可能な行動からその行動の目的を確定しようとしているが，それはできない。目的の確定のためには，推理が必ず必要となる。
(3) ウィーナーらの方法では，人間特有の目的的行動を説明できない。たとえば，かつての科学者は錬金術に取り組んだが，このような無いものを求める行動を説明できない。

こうして，テイラーは，ある行動パタンが目的的（purposive）であると見なせる条件として，行為者の側に以下の 3 つが存在することを掲げた。

(1) 願望；実際に感じているかどうかは別にして，ある物体，事象，将来の事態に対する願望
(2) 信念；潜在的か顕在的かは別にして，ある一定の行動系列が，その物体，事象，将来の事態の実現のための手段として有効だろうという信念
(3) 問題となる行動パタン

ウィーナーらは，サイバネティクスの立場から，人間から機械まで一貫して行動系列として研究しうる方法を開発した。その際，目的的概念を導入する有効性を示した。しかし，ウィーナーらのいう目的的概念とは，大システムを構成する諸部分が相互作用していることを示すにとどまった。その点，人間特有の目的的行動を記述したり，説明したりするには不十分であった。テイラーはそこを突いたので，批判としてはなかなか説得力あるものであった。ただテイラーの場合，自らはどの様な研究方法を提起できたかといえば，「願望」とか「信念」とかいう主観的概念を用いるというものであった。この方法は，客観性を目指している心理学に踏襲されなかった。

ウィーナーらの提起のなかで，とりわけ重要だと思われることは，行動の記述や説明においてシステム的関係を考慮することである。行動をそれ単独で研究するのではなく，目標物に関わる諸関係のなかで研究するということである。チャーチマンとアッコフは，この方向をさらに進めていった。彼らは，ウィーナーらのいう目的的行動（purposeful behavior）をさらに 3 種類に区分した。[8]

(1) 拡張的機能（extensive function）；広範囲な環境のなかで比較的不変な行動を示す場合
(2) 集中的機能（intensive function）；環境が変化すれば，自らの行動を変化させることによって

目標を達成するが，一定の条件下では，１つのタイプの行動を示す場合
(3)　目的（purpose）；環境が安定していても異なったタイプの行動を示す場合

上記の(2)集中的機能は，ウィーナーらの目標制御的行動にあたる。(3)の目的型の行動の特徴について，チャーチマンとアッコフは，次のように言う。

(1)　機械論的ではない。
(2)　選択過程が存在する。
(3)　ある期間内で研究可能である。
(4)　行動体が最終的結果の潜在的な生産者である。

このうち，(2)の選択過程に関わって，「手段―目的」関係に言及した点は，重要な指摘であった。

３．人間の目的的行動の基本的特徴

目的論論争は，行動主義的方法の批判のうえに展開された。ウィーナーらは，目的的概念の必要性は強調したが，外的に観察可能な方法で行動を研究できるとした。これに対して，テイラーは，主観的状態を推理することなしには人間的行動の研究はできないことを主張した。ウィーナーらの主張は，継承されサイバネティクスの発展につながっていった。しかし，いずれの場合も，目的的概念の必要の指摘においては共通している。そもそも人間の行動の記述の段階から，目的的なもの抜きには不可能なことであった。批判の対象となった行動主義の心理学者たちでさえ，人間の行動を扱うときには，暗暗裏にどのような目的で行動しているのかという観点から分類し記述を行っていた。この点，ムーアとルイスの指摘は的を射たものであった。[9] 彼らによれば，ハル学派やトールマン学派のような学習理論においてさえ，目的論（teleology）を無意識的に使っている。たしかに，Ｓ－Ｒの法則樹立過程では目的論を排除していたが，学習理論は，実験の構成や行動の分類の際には行動の目的を考慮していた。たとえば，電撃から逃避するための行動というように。目的の問題をどう取り扱うかは，人間の心理学においては避けて通ることのできない問題なのである。

さて，目的論論争は，目的因の必要性を提起したが，人間本来の目的的行動の記述や説明の問題の解決には及ばなかったと考えられる。ウィーナーらもテイラーも，目的を単純化ないし一面化し過ぎていたのではないか。人間の行動は，自然史の発展のなかから生まれた。そして，他の動物との共通性を持ち続けているが，その一方，他の動物には見られない特徴を持つに至っている。人間的自然は，社会的自然である。当然人間の行動も社会的に営まれる。ここから，人間の目的的行動には，２つの重要な性格が生じる。以下，それについて述べてみよう。

その第１は，人間の行動は，階層的であるということである。したがって，目的的行動といっても，人間の行動を研究する際には，階層の違いを捨象してしまうような単純化をすることはできない。その前に，少なくとも３つの層に分けて考える必要があろう。第１に，随意運動のレベル。第２に，意図的行為のレベル。第３に，人格的活動のレベル。グラスをとりワインを飲むという行動は，研究課題に応じて，こうした３つのレベルから記述されうる。ある男の行動は，手を随意的に動かし，あるいは動かせずにグラスを口まで運ぼうとしたという点からは，第１のレベルの出来事として記述されなければいけない。また，どのような目的のもとにワインを飲もうとしたかという

点からは，第2のレベルの出来事として考えられなければならない。確かに，彼は喉が渇いていたのかもしれない。しかし，その渇きは単なる水分補給によっては癒えないような渇きであったのかもしれない。とすれば，ワインを飲むという行動の隠された目的を解明する必要が生まれる。さらに，自分の前に現れた困難を一杯のワインとともに忘れ去ろうとするのは，まさに彼の人格的な活動でもある。この行動によって，彼は自らの社会的関係を生産ないし再生産する。こうしたいくつかの層の全体として，ある男の行動は遂行されている。刺激に対する反応と言っただけでは，人間の行動にとって本質的なものは失われているのはもちろんのこと，階層の違いを無視して同じ目的的行動として整理しても正しい記述にはいたらない。

第2は，目的の2重性である。社会的であるということは，行動の目的が当の個体一人に関わっているというものではなくて，他者にも関わっているということである。人間は，環境に対して対象として働きかけるが，その対象は，自分にとっての対象であるだけではなく他者にとっての対象でもある。人間は，自分のために行動するとき同時に他者のためにも行動している。ここに，人間の目的の2重性の根拠がある。人間は，1つの行動において，2つの目的に関わるし，関わらざるを得ない。ワインを飲むという行動は，個体にとって喉の渇きを癒すという目的を持っている。しかし，それは同時にある社会的な関係において行われている。一人の乾杯は，自分の人生に対する区切りの象徴でもあった。昨日までの人々との別れも意味していたかもしれない。人間の目的的行動の典型とされている労働活動においては，目的の2重性の基本的性格が最も明瞭に示される。たとえば，ある人が稲を育てるとする。それは，米を収穫するためである。彼は，米を得るという目的を持って行動する。その目的のために，彼は自然法則にしたがう。ここでは，人間と自然の関係が前面に出る。と同時に，米は自分が食べるためだけではなく，むしろ他人のために生産される。彼は，米を生産しながら，相応の人間関係をも生産する。米を得るという目的は，他人となんらかの関係を取り結ぶという目的と2重化されている。彼は，米を意識するとき，自然物としての米を評価すると同時に，社会の評価を評価する。ここでは，人間と人間との関係が現れる。

以上，目的の階層性と2重化についての理解は，人間に特徴的な目的的行動を研究する際に欠かすことができない。それは，行動の原因を明らかにする段階だけでなく，すでに記述の段階においても言える。さらに，人間の心理学にとって，「目的」は研究の前提であるとともに，むしろ研究の対象でもある。

文　献

(1) アリストテレス　出隆訳　形而上学　上　岩波文庫　1959　p 154
(2) 同上　p 155
(3) Rosenblueth, A., Wiener, N., and Bigelow, J., Behavior, purpose, and teleology, Philosophy of Science 10, 1943
(4) 同上
(5) Rosenbluth, A. and Wiener, N., Purposeful and non-purposeful behavior, Philosophy of Science 17, 1950
(6) Taylor, R., Comments on a mechanistic conception of purposefulness, Philosophy of Science 17, 1950
(7) Taylor, R., Purposeful and non-purposeful behavior : rejoinder, Philosophy of Science 17, 1950
(8) Churchman, C. W. and Ackoff, R. L., Purposive behavior and cybernetics, Social Forces, 29, 1, 1950
(9) Moore, O. K. and Lewis, D. J., Purpose and learning theory, Psychological Review, 60, 1953

(昭和63年4月20日受理)